

お
昼

登場人物 男1／とろろ君

男2／竹内君

女／竹内君の姉

お昼。

男1のアパートの庭。

作業着を着た男1がどこかをにらみつけるように立っている。

学生服を着た男2がやってきた。

男2 とろろくん、とろろくん。こんなところに居たんだ。蠮螋君さ、せっかくお昼に帰って来たんだからさ、お昼ご飯カレーうどんにしようかって言ってんだけど姉ちゃんが。僕カレーうどんには天かす乗せたいんだけど蠮螋君どうしたい？僕は蠮螋君だつてカレーうどんに天かす乗せたいに違いないって主張したんだけど姉ちゃんが、蠮螋君は天かすみたいな脂っ気の多い物はお腹痛くなっちゃうからって天かす作ってくんないの。ねえ、蠮螋君だつて天かす乗せたいよね？だつて姉ちゃんの天かすってすげー美味しいもん、サクサクでさ。僕最近天かすが好きなのか天ぷらが好きなのか良くわかんなくなってきたからね。だつて天ぷらつて天かすの集合体じゃない？中身なんかんだつてイイと思うんだエビだろ？毛虫だろ？が。ねえどう思う？とろろ君。

男1 …。

男2 だいたいとろろ君がお腹痛くなるのだつておかしい話なんだ。だつてカレーもうどんも天かすもどれも食べ物じゃないか。どこにお腹が痛くなる毒素が含まれてるって言うんだ。最近の姉ちゃんはどうかしてると思う。ちよつとした事ですぐ怒るしさ、ゼクシイとか出雲殿のCM流れるとすぐチャンネル変えるしさ、僕は別にゼクシイとか出雲殿のCMが見たい訳じゃないのに、その後の不思議体験アンビリバボーが見たいんだ。アンビリバボーって凄いやと思う、僕90%泣く。あー食べたいな姉ちゃんの天かす。

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 「生きる」ってなんだと思う？

男2 そんな事より「僕もカレーうどんに天かす乗せますよ」って言ってやって姉ちゃんに。とろろ君が言ったら作ってくれると思っか。

男1 僕は今不安でたまらない。将来の事とか、この時代に産まれて僕は何をしたらいんだ。

男2 とりあえずカレーうどん食べよ。それで天かす乗せたら判ると思う、幸せだなあつて。

男1 僕は生まれ変わったんだ。生まれ変わった僕はこのまま町のネジ工場で一生を終える訳にはいかない。だけれ今の状態じゃ何も出来ない、何も始められない自分がたまらなく歯がゆいんだ。

男2 僕は歯痒くない。美味しいご飯を食べるにはやっぱり歯が大事。歯が無くなったら天かすのサクサクが判らなくなるし、天かすを噛みたいに舐めなきゃならないのはヤダ。あー食べたいな姉ちゃんのカス。

男1 僕は高校を卒業したらもっと大きな世界に行こうと思つていた。この町は僕には狭すぎる。

男2 僕も鍋をボン酢で食べてるとつくつく思う。あれは鍋が美味しいんじゃないかってボン酢が美味しいんだつて。あのボン酢で奴は魔法の液体だよ。その辺に生える草とか湯がいてボン酢につけたら美味いと思う。あー食べたいな姉ちゃんのカス。

男1 …君は、幸せだよ。

男2 全然幸せじゃないよ、僕姉ちゃんの手に掛かったらなんでも食べれちゃうんじゃないかって逆に怖いからね。そのままの勢いで姉ちゃん自体食べちゃったら誰が姉ちゃんのカス作ってくれるんだ。

男1 竹内君。

男2 はい。

男1 僕にはもう時間が無いんだ。

男2 死ぬの？

男1 …死なない。

男2 じゃあはよして、姉ちゃん待つてるから。とろろ君に天かすのこと聞いてくるって言って出て来ちゃったんだ僕。

男1 僕ね、今お昼休憩中なんだ。

男2 あ、うん。

男1 今後の事を考えていたら、君達姉弟の事が心配になってね。僕が居なくなったら、君達は生きていくのだから。

男2 どうか行くの？

男1 …うん。

男2 早く帰って来て。

男1 竹内君

男2 はい。

男1 僕の帰る場所は、ここじゃない。その為に僕は今一生懸命働いて、お金を貯めて、勉強もして、

男2 ねえ結局天かす乗せるの乗せないの？

男1 いいかい僕はね、カレ〜うどんに天かす乗せる乗せないの話くらいじゃあわざわざ帰ってこない。

男2 僕忙しいんだけどなあ

男1 お前が言うな！

男2 だって姉ちゃん待つてるもんお腹空かして。

男1 うん僕の家でね。

女の声 みどり。

男2 姉ちゃんの声だ。

男1 お前みどりって言うの？

男2 ほら、姉ちゃん怒ってるじゃないかよ。姉ちゃん。

女、庭の窓を開けて顔を出す。

女 何やってんの？…もうすぐ出来るわよ。

男2 うん。でもどろろ君がなんか訳わかんないこと言ってるから、ねえどろろするの、どろろ君。

男1 …あ、もう少し。

男2 もお、はよしてえ。

女 …うどんは、コシが命よ。

男2 はい。

女、台所へ。

男2も後を追って部屋に入ろうとする。

男1 竹内君

男2 なに？

男2、庭に出てくる。

男1、窓を閉める。

男1 僕はね、君と君の姉さんの住んでいたアパートが火事になって、どこにも帰るところが無くなった

時、確かに家に来て「イイ」と言った。

男2 うん。

男1 でもいつまで居る気？

男2 ん？

男1 もう一年経つけどいつまで居る気なんだい君達は？

男2 え、どういう事？

男1 どういう事じゃなくて、ここ僕んちなんだけど。

男2 姉ちゃん！

男1 姉ちゃんはええんだわ、君だよ。

男2 え？

男1 君にしっかりと貰いたいんだ僕は。だって姉さんは相変わらずムーばつか読んでるんだろ？

男2 うん、ムーばつか読んでる。

男1 だろ、だったら君が頑張らなきゃしょうがないじゃないか。

男2 姉ちゃんが言うにはタイムマシンは未来には行けるけど過去には行けないんだって。

男1 知らないよそんな話は。

男2 タイムマシンなのにね。

男1 …うん、なんで？

男2 姉ちゃん！

男1 姉ちゃんはええわ呼ばんで、長なるで。

男2 タイムマシンあったらどこ行きたいとろろ君？

男1 …うーん、

男2 僕ね、中国。

男1 …あ、そう。いつの？

男2 いつでもいい、本場の麺が食べたい。

男1 それ飛行機でええがや。なんの為のタイムマシンなんだ。時を超えろ。

男2 姉ちゃん！

男1 姉ちゃんはええんだわ！

男2 じゃあとろろ君は？

男1 うーん…

男2 あとね

男1 おい、答えさせて。

男2 あ、ごめん。

男1 そうだ僕はね、君達の家が火事になる前に行きたいね。火事になる前に鍋の火を消しに行く。そして

たら僕は全頃一人でもっと自由だったはずだ。

男2 じゃあご飯どうすんの？

男1 ご飯みぢやなんとでもなるがや。

男2 あーあ、姉ちゃんの天かす食べられない、かわいそうに。

男1 僕の心配より君、自分の事を考え給えよ。

男2 僕は大丈夫だよ、姉ちゃんが毎日ご飯作ってくれるから。

男1 ご飯だけじゃなくてさ、生きるって事はもつとあるだらういろいろ考えなきゃいけないことが。この

不景気の日本、民主党も頼りにならない、年金だつて怪しいモンだ。君大丈夫か？生きていけるかい？

男2 そう言われると…

男1 だろ？

男2 急にお腹が減つてきぢやつたじゃないか。

男1 ；竹内君さ、今日何してたの？

男2 朝、ご飯食べてから？

男1 うん。

男2 朝、ご飯食べてからは、お昼、ご飯の事を考えてた。

男1 バカか。

男2 お昼、ご飯を食べたら、晩、ご飯の為に万全のコンディションを整えておきたい。

男1 僕はその間ずっと働いていた、午後からもまた仕事に戻らなくぢやならない。

男2 うわー。

男1 ねえ竹内君。

男2 はい。

男1 これおかしいと思わない？僕と君は同じ年に生まれ同じ年に高校を卒業した、なのになんで同じ年に就職しなかった？なんで僕はっかり働いて君達姉弟を養つていかなきゃならんの？今のうちに働き

口を見つけてたね、姉さんと君の生活の基盤を築いた方がいいと思っんだよ。

男2 でも姉ちゃんにとろろ君は結婚してる訳だから、

男1 おい竹内君。

男2 はい。

男1 それは初耳だ。

男2 え？

男1 僕は君の姉さんと結婚した事は一度もない。

男2 そうなの？

女の声 あなた。

男2 姉ちゃんの声だ、とろろ君姉ちゃん呼んでるよ。

庭の窓を開けて、女が顔を出した。

女 もうすぐ、飯出来ですよ。

男2 はい。

女 お箸並べて。

男2 (女に) ねえ、天かすは？

男1、ベランダの窓を閉める。

男1 さあ困つた事になった。いよいよ君の姉さんは僕の事を「あなた」と呼び出した。

男2 だからとろろ君が天かす乗せたいって言つたら作つてくれるんだよ。

男1 完全に僕は置いてけぼりだ。

男2 でも天かすだけを作る為に小麦粉と卵を混ぜる姉ちゃんが素晴らしいと思う人として。

男1 もお天かすヤメテ、うるさい。僕今、パニックだから。

男2 だつてとろろ君が天かす乗せるかどうか聞きに来たんだもん僕。

男1 じゃあ乗せない。

男2 乗せないの？！

男1 乗せない。

男2 じゃあ姉ちゃん天かす作ってくんないじゃん！姉ちゃんは最近僕の為に飯作ってくんないんだ

からね（しやがむ）！

男1 …じゃあ乗せる！

男2 （立つ）簡単に答えんな！

男1 竹内君。

男2 とろろ君天かすの事馬鹿にしとるだろう？あいつらなんか所詮天ぶら作った時に出てくるカスだって

思つとるだろう？

男1 竹内、

男2 あいつらカスだけど、タダのカスじゃないでね！いつまでもカスだと思つとつたらあーもー食べた

いな姉ちゃんのカス！

男1 竹内！

男2 はい！

男1 大人は天かすなんかに躓いている暇はないんだ！もつと大事な事がたくさんあつて、それをひとつ

ひとつ乗り越えていかなくちやならない！

男2 大人はカレーうどんに天かす乗せないと言ふなら僕はそんな大人にはなりたくない！

男1 大人だつて天かす乗せる人はおる！でも大人は天かすとは無関係に働く！働いて働いて働いて弁当を食

う！カレーうどんなんて有り難いわあつたかいから。弁当は冷えている！こはんカチカチ！カチカチで
も食う、それが大人！僕はそれを毎日食っている。

男2 …ご飯 カチカチ？

男1 …そうだ。

男2 …ごめん。

男1 …ううん。

男2 …今日のおかずなに？

男1 …竹内君。

男2 はい。

男1 はよ出てつて。

男2 ん？

男1 僕はこんなところまでいつまでも止まっている暇はないんだ。はよ出てつて。

男2 ヤダ。

男1 君達が居るとちつとも僕の目標が定まらないんだよ。

男2 でも姉ちゃんが言うには、2020年に人類は滅亡するらしいよ。

男1 あ、ホント？「じゃあ良かった」なんて言つと思ふかい僕が。

男2 でも僕と姉ちゃんは宇宙人だから大丈夫なんだつて。

男1 それはそうかもしれないね、訳わかんないから。

男2 とろろ君は地球人だと思う。だからとろろ君は2020年に死ぬ。

男1 おつそういう事言つ僕が死んだら君達姉弟はどうやって暮らすんだい？

男2 それはわかんない、姉ちゃんに聞いてみようか、とろろ君も宇宙人でいいかどうか。

男1 そんな事言つたら地球人だつて宇宙人じゃないか。

男2 え、どういう事？

男1 火星から見たら地球人だつて宇宙人だろうがよ。

男2 え、火星人が居ると思つてるの？

男1 あ、もうすぐ昼の朝ドラが始まる時間だ、こんなどうでもいい話で僕の休憩が終わつてしまふ。

男2 （笑いながら）ねえとろろ君知つてる？火星人なんか居ないんだよ。

男1 君は一体なんだ？毎日毎日卒業してまった高校の制服を着て、アホと違ふか。

男2 アホじゃない。

男1 まず君はちゃんと働きなさい。そしたらこつという新しい制服だつて貰える。僕がこつして仕事をし
ている時なせ君はそんなに天かすの事に必死なんだ？いつそ天ぶら屋で働けばバカ。目標が無いならせめ
てなんでもイイから働くんだけ。働いてお金を稼いで、食べるだけじゃない、住むところや、着る物や、
生活する為に必要な全ての物を自分で手に入れるんだ。生きるつて事はそういう事だ。

男2 はい！

男1 いい返事だ。君がそういういい返事をする時はたいいて理解していない時だ。

男2 はい！

男1 時間はあつという間なんだ、いつまでも高校生気分を満喫してるんじゃない。

男2 はい！

男1 もう出てつて！

女の声 みどり。

男2 あ、また姉ちゃんの声だ。ほらだいがイライラしてる、ヤダなあもお。

女 庭の窓を開けて顔を出す。

女 ちょっとおむつ買ってきて。

男2 カレーうどんは？

女 おつかい行かない子にはお昼ナシです。

男2 はい！

男2、去ろうとする。

男1 竹内君

男2 はい。

男2と二階に女も近づく。

男2 あ、姉ちゃんも竹内だから、どっち？

男1 お前に決まるところがや。

男2 なに？

男1 …ねえ、さっきの話、聞いてみて。

男2 あ、うん。姉ちゃん、とろろ君も宇宙人でいい？

男1 竹内君

男2 はい。

女 いい。

男2 イイって。

男1 その事じゃなくてさ、

男2 だってこのままだととろろ君2020年に死ぬよ。

女、男2の袖を引っ張る。

男2 ん？

女 (それ違ってた、2043年だった。)

男2 それ違うつて、2043年だって、じゃあとろろ君もうちよつと長生き出来るの？

女 (うん)。

男2 良かったね。

男1 そうじゃなくて、いつまでここに居るのかつて…

女 (男2に)…これ、お弁当。

男2 え、いいの？やった。

女 違う。

男2 え？

女 …(あの人に)。

男2 とろろ君、今日お弁当忘れてったの？

男1 …あ、うん。

男2 死ぬ気かお前！

女、慌てて弁当を男1に。

男1 …あ、でももう食べる時間、ないです…。

男2 じゃあ僕食べるよ、あー食べたいな姉ちゃんのカス。

女 …お仕事、頑張つて。

男1 …はい。

男2 ねえ結局天かす乗せるの乗せないの？

女 早くおむつ買ってきて。

男2 あ、

女 ヨーイ(走るポーズ)、

男2、走り去った。

女 部屋の中へ。

鍋が煮えている。

女 赤ちゃん用のおもちゃのスイッチを入れる。

男1 ……あのお？

女 今日は、晩ご飯にしますから。鶏ガラ炊いて、ダシとつて、美味しい水炊きにしますね。

男1 ……

女 お父さんは毎日働いて、疲れて帰ってくるでしょうから、「お父さん、いつもありがとうございます」って。

女 カゴに寝ているらしい赤ちゃんの手を持って話しかける。

男1 ……竹内君！

男2 はい！

男2、走って戻ってきた。

女も出てくる。おくるみに包まれた赤ちゃんを抱えて。

男2 あ、姉ちゃんも竹内だからどっち？

男1 ……これはもうとんでもないことになってるよ。ついに我が家に赤ちゃんが出来てしまった。

男2 わ、おめでどう！男の子？女の子？

男1 竹内君…

女 男の子…

男2 男かあ。

男1 僕はね、君の姉さんと結婚した記憶もないし名前も知らない、ていうかほとんど喋った事もない。

男2 あ、姉ちゃんの名前はゆうこ、竹内ゆうこ。姉ちゃん、とろろ君は蠟燭太郎、略してとろろ君。

男1 略さないで。

男2 ほら、姉ちゃん、とろろ君がお話したいって。

女 あ、はい。えーこの先新しい時代に産まれる子供達ですね、我々とはDNAからして違うらしいんですね。新しい時代に生き残る為、人類の進化が始まるのです。

男1 ちよお竹内君。

男2 はい。

男1 ……こんな感じなんだ。このように全く話が合わない。なのに赤ちゃんが出来てしまった。

男2 そりゃ結婚してるんだから赤ちゃん出来るよ。

男1 ……ねえ僕の子？

男2 コラ、とろろ君！

男1 だって…

男2 ほら、姉ちゃん泣いてるじゃないか。

女 いえ、フオレストガンブ思い出したんです。

男2 なんで今？ごめんねとろろ君、コレ姉ちゃんがどうしても言いたいわから。

女 ちよつともお…（恥ずかしそうに肘で突く）

男1 ……どれ？

男1、顔をみようとすると、

女、男1におくるみを渡す。

男1 ……

男2 名前は？

男1 名前なんて決めてる余裕無かったじゃん！

女 あなたはずっと忙しいから、そういう話も出来なくて…

男2 じゃあ僕決めてあげる。天かす、竹内天かす。

男1 ヤメテそんな名前。なんで竹内？僕は婿養子か。

男2 おい、天かす。

男1 天かすじゃないよ。天かすなんて名前にしたら君食べちゃうだろ、許さんぞ。

男2 食べないよ、たぶん。

男1 もおはよ出てって、君が居ると食費が重むんだ。子供が出来たからにはお金はどんだけあっても足りないんだからね。

男2 ヤダ。

男1 働けほいで。

女 みどり、

男2 はい。

女 そうしなさい。

男2 え…？

女 もうあなたは立派な大人なんですから、なんでも一人でやらなきゃだめ。

男2 …姉ちゃん。

女 大丈夫、あなたならきつと出来るわ。

男2 わかった。よし、じゃあ姉ちゃんのところへ君、今までどうもありがとう。

男1 ちよお竹内君

男2 はい。

男1 君、僕がただ言っても聞かなかったのに姉さんの話にはイチコロだな。

男2 だって姉ちゃんところへ君は家族だけど、僕はもう家族じゃないんだ。姉ちゃんが新しい家族を持

ったなら、僕も新しい家族を持たなくちゃ。心配しないで、僕は好き嫌い無いですからすぐに家庭を築ける

と思う。

女 みどり、元気で。

男2 はい！

男2、走って去る。

男1 竹内君！

男2 はい！

女 ヨーイ、

男2、走り去る。

男1 …あいつ何も持たんと行ってまった…。

男1、赤ちゃんを見ている。

男1 いつの間にか…。

女 …あの、タイムマシンはですね。

男1 …え？

女 …未来に行くのは、理解出来たんです、私にも。でも過去に行くことはどうしても理解出来なくて…。

あの、ところろさんは今、光のスピードで昇るエレベーターに乗っているとしますね。

男1 …は？

女 私はそれをここから見えています。はい、今ところろさんは光の速度でぐんぐん上昇しています。しています。

男1、上昇しなきゃいけないものかと悩む。

女 あ、上昇してまずけど動いてないものとなります。

男1 え？

女 これは現実ではけしてあり得ない状態なんですけど、動いてるんですけど止まっている物として考える

んです。そこに、横から光がびゅーつと飛んできて、一秒掛けて横切るとします。ところろさんから見

ると、目の前を光が横切るいつもと同じ光景なんですけど、その様子をここから見ている私には、光はこ

うんな感じで斜めに走ります。光の速度は絶対で、速度を変えたりしません。これでところろさんにとっ

ての一秒は、私にとって二秒になりました。これが、タイムマシンが未来に行ける方法ですね。

男1 …ん？

女 えー、つまりところろさんがこの光のエレベーターのように速く生きてしまつたんですね、未来はかりが

見えちゃうんですね。

男1 …え？

男2、戻って来る。

誰かの手を引っ張っている。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

男2、戻って来る。

女 もうすぐ晩ご飯だから我慢しなさい。

男2 はい。

男2、座ってテレビをつける。

NHKの昼ドラがやっている。

男1 あ…、もう昼休憩が終わる、仕事戻らなきゃ。

女 天かすももう高校生ですし、あなたは充分働きましたね。

おくるみを広げると白いシーツ。

床に広げて皺を伸ばす。

男1 …もう高校生？僕は天かすって名前は反対したはずなんですけど、そうか、息子はもう高校生か…。

女 最近たまに話す事といえば、背中が痛いだの背中が痒いだの。天かすが結婚して家を出て行き、定年を過ぎると、私達はまた二人。私は相変わらずとろろさんに飯を作って

男2 ねえ、でも僕まだお昼ご飯食べてないんだけど？

女 とろろさんのボケは加速していきますね。

男2 食べたいなあ、姉ちゃんのカス。

女 でもあなたがお昼食べてもまた夕方にはお腹空くんじゃしよ？

男2 うん。

女 じゃあ今食べても意味ないじゃない。

男2 あ、ホントだ。

女 時々そんな会話をしたりなんかして、そして私より先に死にました。背中が痛いのが原因で。私は

その後しばらく、何年か、あなたの後片付けとかして死にます。私は、あなたのご飯を作って、片付けて、たまに話をして、そんな毎日でしたね。

女 おくるみをたたんで、キッチンに戻りながら

女 でも、だいたいこんな感じで、私は満足なんですけどね…。

男1 …。

男2 (女に) でもさ、そんな事言ったら夜食べても次の日の朝にはお腹空くでしょ、じゃあいつ食べたらいいの？

女 お腹が空いたら。

男2 じゃあ今！

女 さっきの人、誰？

男2 あ、家族。

女 家族は食べものじゃない。

男1、部屋に入ってくる。

男2 とろろ君、僕もすぐ家族出来たけどね、すぐ逃げられちゃった。

男1 …もう、お昼休憩終わっちゃったよ。

男2 (テレビを見て) あ、ホント？

男1 …お腹空いた。もうずーっとご飯食べてない気がする。

男1、座る。

女 じゃあ晩ご飯にしますね。たまにはゆっくり食べて下さい。

男2 ねえお昼は？

女、台所で野菜を切っている。

〜終〜

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp